



CELEBRATE  
ROTARY

100 Years

## ロータリーを 祝おう 100年の歩み

2004～2005年度 国際ロータリーのテーマ

第2560地区  
ガバナー — 横山 芳 郎  
会 長 — 渡 邊 喜 彦  
会長エレクト — 小 越 憲 泰(クラブ奉仕A)  
副 会 長 — 渡 辺 勝 利(クラブ奉仕B)  
幹 事 — 五十嵐 寿 一  
S A A — 船 越 正 夫  
会 計 — 荻 根 澤 隆 雄

例 会 日 — 毎週水曜日 12:30～  
例会場及び 事務局 — 三条市旭町2-5-10  
三條信用金庫本店内  
例 会 場 — TEL 35-3311  
事 務 局 — TEL 35-3477  
FAX 32-7095

E-mail: sanjo-ss@web-niigata.ne.jp  
web: http://www.soho-net.ne.jp/rotary/  
(はshiftを押しながら“へ”のキーを押してください)



本日の出席会員数	66名中 53名
先々週出席率	76.56 %

### 先週のメイクアップ

8/26 燕RCへ

松谷 昊吉さん

8/31 三条北RCへ

長谷川有美さん、菊池 渉さん、  
五十嵐晋三さん、松谷昊吉さん、  
浅野金治さん

## 会長挨拶

渡邊喜彦 会長



みなさんこんにちは。台風もすぎ少しすずしくなった様ですが、まだまだ残暑厳しい中です。夏のつかれも出てくる頃ですので、皆様健康に御留意下さい。

本日の卓話は当クラブの新会員でおられます伊藤寛一君にお願いすることとなりました。伊藤さんご苦労さまですが、どうぞよろしくお願ひいたします。

今日は1日です。私はS51より28年間毎月1日を原則として墓参りに行って居ります。報告と誓い、そして願ひなどさまざまですが、毎月1日夫婦で行かれる事に感謝して居ります。

さて、アテネオリンピックも盛会裡のうちに終了し各国の選手が成果を胸に帰国されました。日本の選手諸君も今大会は大変な活躍で、久しぶりに日本の実力を世界に示してくれました。特に過去メダルの取れなかったいろいろな競技にメダルを獲得してくれたのはすばらしいことだと思います。あらためて選手の方々

の労をねぎらいたいと思います。それにしても男子ハンマー投げの金メダル選手であるハンガリーのアドリアン・アヌシュ選手のドーピング検査拒否の失態は何回も過去繰り返されてきたオリンピックの教訓が生かされていない実態を浮き彫りにし、反面賞獲得への目的と取り組みが純粋な競技精神を無くさせ、ただ競技に勝てればよいという低級な意識になりつつあるという忌々しき状況を露呈したものと思います。

各国の首長、元首は本来のスポーツ精神に則った正しい競技のありかたを、アテネというオリンピック原点の地に戻った今回を契機に認識を新たにしたいと念願するしだいです。

今年は台風のあたり年で台風が多く、先日も16号で被害がたくさんもたらされました。地球の掃除屋、それが台風であると思っており、ある意味ではわれわれの掃除のできない大気を年に何回か掃除をしていただくのはありがたいと思います。しかし、我々が地球を汚さず、大気を汚染しなければきっと台風も大きさ、回数とも減るのではないか、と思うしだいです。お互いに一人ひとりが母なる地球を汚さず大切にしていきたいものと思います。以上で本日の会長挨拶を終わります。

## 幹事報告

五十嵐寿一幹事

見附ロータリークラブより  
水害義援金のお礼状がとどいております。

## ニコニコBOX

渡邊喜彦さん

アテネオリンピック参加の選手の方々御苦労様、そして大量のメダルをありがとうございました。本日卓話をさせていただき伊藤さん、楽しみにして居ります。

渋谷正一さん

7・13水害にクラブからのお見舞いありがとうございました。嵐北の家でも床上50cm位あり、中の品物は何もなくなりました。

会田二郎さん、高橋 司さん、金子俊郎さん、山田富義さん、杉山幸英さん、丸山行彦さん、川又嘉瑞範さん、荻根澤隆雄さん、早川昭雄さん、石塚欣司さん

伊藤さん、卓話御苦労様です。

平原信行さん

都合により早退いたしますので。

青木文雄さん

都合により早退させていただきます。

川瀬康裕さん

都合にて早退させていただきます。

石月良典さん

申し訳ありません。本日は昼食後退席させていただきます。

船越正夫さん

本日の例会欠席してすみません。杉山前SAA委員長さん、よろしくお願い致します。

9月1日分 ￥ 18,000

今年度累計 ￥ 185,000

## 卓話

伊藤寛一会員



本日このような席から話せ、と言われまして男54歳、返事に戸惑いました。

ご存知の方もおありかと思いますが、一ノ木戸商店街東側で靴店を経営しております伊藤と申します。ついこの間、7・13水害でテレビなどで真っ先に報道されました一

新橋近くであります。皆様からも心強いお見舞いを頂戴しこの席をお借りしまして御礼を申し上げます。

昭和30年、(株)いとう屋から父の代より靴の店として分家いたしました創業48年となります。その頃、水野久美さんや今は亡きジャイアント馬場さんが芸能界、スポーツ界へと旅立たれ16文、30cmの革靴を親が探し回り特注していたことが記憶に残っております。当時私は馬場さんの足がバケツのように見えた事をよく覚えております。

その後、小売業界も景気がよくなり専門店界、商店街組織の形成が急速に高まり、私共の業界も下駄屋さんや注文靴屋さんなどが小売業界に転向され始めました。

その頃の事を思い出しますと昭和36年、第二室戸台風、当時の店舗は戸板でした。必死でその戸が飛ばされないように何時間も押さえつづけました。やがて静かになったので2階に上がり見上げれば屋根がなくなり星空がありました。

昭和38年の豪雪、39年の新潟地震、父親の運転する買ったばかりの360cc軽自動車で見舞いに廻りました。当時は被災地でも自動車の量も少なく、交通規制など無かったし、通行できない道路を迂回しても割りりとスムーズに行って帰ってこれました。今回の災害と違い車の量が違ったんだなあと思います。

その年の7・7水害、商店街や地域の方々、大勢でまとまり土嚢積をし五十嵐川からの冠水を防ぎ商店街や地域を大人の方が果敢に守りぬいた事は子供ながら先輩達の気迫には強い思い出を持っております。

当時私は絵を描く事が好きで、橋のたもとにある杉山額縁店さんが流されご主人が亡くなられた事が大変ショックでございました。

今回の7・13水害を振り返りますと、現代は物で溢れかえり価値観も多様化し、物質優先で人の気持や思い遣り等が薄れているような気が致します。本当の意味での防災や、災害復旧とは大変難しくなってきたと思います。

そのようななかで商店街も景気の波に乗り約40年前、各商店一軒一軒が自分の道路側の土地を供出しあい、セットバックを計画し、当時県から一ノ木戸方式などと言われるアーケードや共同店舗を35年前に完成させ現在の一ノ木戸商店街に至った訳ですが、シャッターが各店舗に取り付けられ、これでやっと台風からも戸板を押さえている必要が無くなったと思いきや、シャッター通りなどと言われるほど急激に商店は衰退をし、商店街という言葉も歴史の教科書に記載されそうです。

いかにしたら皆様に忘れられないで興味を持って頂ける楽しい店造り、地域造りが今後も私共の課題だと思っております。

それと同時にこの災害を契機に新しい街づくりの構想が住宅、商店とも一体となった災害に強い都市計画が考えられたら又、街の顔も変わり若い方も老人も街の中心部に大勢、仲良く暮らしたいと思われ街造りになったらいいと思います。

いままで申し述べました通り、この僅か4～50年の間に、街も暮らしも急激に変化をして来ている事はまさに実感するところでありますが、話をもっと足元に向けてみますと、私共の取り扱っております靴の話になる訳でございます。戦後下駄やゴム靴、地下足袋、運動靴の時代から革靴、スニーカーと言われる時代に変化してきております。

ここで私だけの能力では対応し切れませんので大塚製靴(株)会長(日本機械靴協会会長)大塚斌あきら氏の書かれた著書「はきごこち」から引用させて頂きお話をさせていただきます。

日本人の足元には昔から草履、わらじ、下駄、という文化があり長く続いたわけですが、西洋との出会い、交流により洋服、洋靴、洋食が入りはじめ、やがて異人館がつけられ、日本人も洋風の館に住むようになってきました。

洋服という言葉は、日常用語として定着し、私達は全く違和感を抱きません。しかし、“洋靴(ようかぐつ)”という言葉を使いますと、奇異な感じをもたれると思います。

洋靴がそれほど日本人の身近なものになっていたかといえますと、事情はまるで反対でした。これほど長く関心をもたれず、したがって知られていなかった商品も少ないのではないのでしょうか。

私はこれから、日本人たちの足に西洋式の靴がど

う係わり合ってきたか、近代日本にみられる洋靴の発展と今の姿、そして日々の暮らしの中での靴について述べたいと思います。

日本の洋靴に、近代的工場様式が導入されてから120年ほどになります。その特徴は徳川封建制の下、社会的に不当に差別されていた人たちを1つの柱とし、他の2つの柱として幕藩体制佐倉藩と和歌山藩の崩壊の中から起こった流れ、この3つの異なった土壤に、日本近代洋靴が芽生えたことでした。

明治になり、かたち創られた日本の靴産業は3つに類型化されます。すなわち皇室に代表されるイギリス、フランス風の靴づくり。

海軍軍靴にみられる英米流の靴とその背景となる技術・機械。

陸軍軍靴に特徴付けられるドイツ式靴とそれを生んだ技術・機械。それらの流れが第二次世界大戦終焉まで80年間続きました。

アメリカの占領下に始まった戦後のわが国靴産業の活動は、昭和25年、朝鮮戦争のアメリカ軍需特需を契機として復興したこと、日本生産性本部が発足早々の昭和30年秋にアメリカへ派遣した日本製靴業生産性視察団が経営・マーケティング、製造の全般について専門的に見直すことから始めました。『靴屋の魂である木型(ラスト)』を改めて導入し直すことをキイとした標準化をその軸とし、生産性向上と消費者サービスを展開しました。

その後、欧州とくにイギリス・ドイツとの交流、さらにコンチネンタル調の流行とともにフランス・イタリアの靴産業と深くかかわるようになりました。

イタリアの靴産業も1950年末になって、芸術的センスの豊かな国民性と、出稼ぎ労働者の帰国により、ようやく国際的に認められるように成長を始めました。これらの国々をモデルに、より創造されたスタイルと、それを商品として製造する靴型と生産技術・機械設備の導入、さらに市場へのマーケティング技法、これら全てを総合的にわが国の靴業界上げて精力的に導入しました。

このように日本の靴産業は戦後40年を織り成し、特徴づけられています。しかし、この120年を振り返りますと業界の発展と変化の中に、さほど変わっていない本質をかいま見る想いがします。「しづとさ」といふか、アジアの生産様式の日本の特徴がこの靴業界を通して感じられます。と大塚斌氏は語っています。

尚、斌氏は氏族転業政策により佐倉藩主堀田正倫まさとしが曾祖大塚隊乃丞なるしゆうに靴造りを依頼された4代目であります。

さて斌氏は自然科学におけるアプローチから社会学においてのアプローチをされておりますが、400万年前のアフリカ、タンザニアで発見された親子の足跡に感銘され、人類学、社会科学など靴との係わ



りの中で経営者だけでなく、学者としての一面も強く覗かせます。

つぎに、近代洋靴誕生について次のように記しております。

16世紀中頃の南蛮貿易が盛んになり始めたころ、豊臣秀吉が息子秀頼誕生の知らせを聞き、『朝鮮の役』の本営があった佐賀の名護屋から京都へ8日間の旅をしたとき、供回りの者達にポルトガルの服装を着せて通したという当時通訳ロドリゲスという人が記していたそうです。その長旅時、ひだ襟の付いたシャツ、半ズボン、帽子、洋靴はどのように調達したのかと想われます。その長旅の靴は歩けたのか歩けなかったのか、まさしく電車に乗るわけにも行かず興味をそそるところです。

わが国の中世以降の解放性の和服、下駄に比べて閉塞性の洋服と靴はまことに窮屈でした。にもかかわらず、多くの人々が近代化を進める新政府の方針に従って、洋服に身体を合わせ、洋靴に足を合わせたのです。この不自由で急激な変革の典型は昭和20年の太平洋戦争まで帝国軍隊の中において、無理を承知で『足を靴に合わせる』慣行として生き続けたのです。

日本人に洋服が実用的な衣服として普及するのは、関東大震災で家も衣服も焼き尽くされ、いわゆる『文化住宅』が建ち始める大正末期で、なお半世紀を要しました。

以上、近代日本が洋靴を受け入れるまでの急激な変化を大塚斌氏の書物をお借りし述べさせていただきましたが、その後の大正、昭和、平成、と細かく説明を申し上げればよいのですが、ここにお出での皆様の方が、価値観の多様化した中で足に合った靴をお履きの方も、靴に足を合わせておられる方も、靴選びの難しさはいまなお実感としてお持ちのことと思いますので、敢えて細かく申し上げるつもりもございませんが、先にも申し上げましたとおり、一般に靴が店頭に並び自由気ままに手にとって試すことが出来るようになって僅か50年ほどです。

団塊の世代の私達も急激に高齢化に向かって突き進んでおりますが、どの産業も明治維新後、同じことが起こり、現在もその変化はよりグローバルになり、加速度を増している事と思っておりますが、よりよい意味

での発展改革は今後とも精一杯取り組んでいく必要が有ると思います。

足元の文化はまだ始まったばかりとっておりますが、どうもいつも後回しになりがちなのでファッションは下から上へです。上から下へでないところをお間違えの無い様、お忘れなくお願い申し上げます。

以上でございます。有難うございました。

次々週例会 9月15日 外部卓話  
三条保育所 所長 澤 康子様

次々週例会 9月22日 休 会

